山本典正（やまもと のりまさ）

平和酒造株式会社 代表取締役社長

和歌山県海南市出身
1978年5月生

1997年
智辯学園和歌山高等学校卒

2003年
京都大学経済学部卒

海南市溝ノ口にある平和酒造㈱の社長でみずから海外へ営業に飛び回り、また執筆や講演活動など幅広く活動している山本さんにお話を伺いました。

取材日：令和3年11月23日

智辯和歌山時代はどんな学生だったのですか。

蛍が飛ぶような田園地帯の田舎の小学校から智辯和歌山に入学したのですが、中学、高校と成績がよくなくて、かといって何か他に熱中できるようなことも見つけられず、悶々とした学生生活を過ごしていました。智辯生の一部にあるような、鬱屈した気持ちを抱えながら中高と6年間を過ごしました。（笑）

では、学校はおもしろくなかった？

学業的には優れなくて鬱屈した生活でしたが、学校に行くことは好きでした。放課後や朝一番にクラスメイトと話す時間が好きで、それがあったから通い続けたのかな、と思います。

応援団もやりましたし、球技大会とか文化祭とか、学業以外のところは非常に頑張った想い出があります。同級生とは、お互いの生活が違うので頻繁には会えないのですが、2020年に開業したキーノ和歌山の「平和酒店」にクラスメイトが買いに来てくれたり、SNSにアップしていただいたり、自分の仕事を通じて昔のご縁がつながっていると感じることがあります。

智辯卒業後はどうされたのですか。

現役時代は同志社大学に進学しました。でも、入学後に病気をしてしまい、結局2年留年するようなかたちになってしまったので受験をやり直し、京都大学経済学部に合格することができました。2年浪人したようなものです。勉強自体は好きでなかったのですが、ベースとして智辯和歌山でやってもらってきたことが活きたと思っています。

京大入学後は、3回生までは麻雀ばかりしていました。麻雀で時間をつぶすという無為なことに時間を使うことは、大学時代のモラトリアムな期間でしかできないと思ってやっていた感じです。他にも全国各地を旅行したり、この時期でないとできないことをしていました。

当時の智辯和歌山では、大学合格するまでは遊ぶな、大学入学後は好きに遊べ、のようなことをよく言われていたと思いますが、僕はそのとおりにした感じです。（笑）

大学卒業後すぐに戻ってこられたのですか。

17年前、2004年に帰ってきました。

就職活動をしている中、人材派遣のベンチャー企業にインターンシップというかアルバイトとして働いていました。小学生の頃から日経新聞の「私の履歴書」を読んで有名経営者の方が戦国武将のようにかっこいいと思っていましたし、智辯在学中には、自分は、成績は優れないけれども社会に出たときには経済的、経営的な部分で社会貢献をして、自分の身も立てていけたらと考えていました。家業を継ぐのか、ベンチャー企業を興すのか、とにかく経営者になりたいと思っていましたので、そのベンチャー企業に就職することにしました。

ベンチャー企業は華やかなイメージがあるのですが、仕事自体は泥臭くて社会のいろんな側面を見ることができた仕事だったと思います。当時の僕は、経営者への道筋を決めるのは20代で決めなくてはと思っていたのですが、会社に勤めている間に、起業するには当時の自分の力では随分と時間がかかるだろうということがわかり、また、その時期、実家の父の体調がよくなかったということがあり、和歌山に戻ることにしました。

平和酒造㈱ 外観

戻ってこられてからの会社の展開はどうだったのですか。

当時はまだ昭和の価値観といいますか、「地方より都会の方がいい」といった風潮がありましたし、東京でヒルズ族みたいな成功ができたらという思いを持って東京に行っただけに「都落ち感」がありました。夢半ばでしたので、後ろめたい感覚もありましたね。

当時、会社では99.9%紙パックの日本酒を販売していました。でも、この先はもっと高価格、高品質なものを作らなければと考え、真っ先に作ったのが「鶴梅」というリキュールでした。おかげさまでそれが、大手サイトで約10年1位に輝き続ける大ヒットとなりました。その3年後、もう一度日本酒をやりたくなって「紀土（KID）」を作り始めました。

鶴姫

昨年、「紀土 無量山 純米吟醸」は世界で一番大きなコンペティションであるIWC（インターナショナル・ワイン・チャレンジ）で1401種の出品中優勝することができました。

どのようにして輝かしい実績につなげた？

日本酒は作っていたのですが、会社の目標をどこに置くのかという部分の共通認識ができていなかったので、「世界で一番の品質の日本酒を作ろう！」という目標を社員と共有しました。それが「おいしさ」につながったと思いますが、目標を共有するまで、10年以上かかったと思います。あとは共に学ぶような組織づくりみたいなことをしてきました。勤務終了後、50種類くらいの利き酒をします。お酒の美味しさを共通の言葉や認識できるようにしていくことによって、蔵の方向感を共有してきたように思います。50種類の利き酒を毎日行うことで、1種類の利き酒でそのお酒の輪郭がはっきりわかるようになりました。

紀土

「紀土」は杜氏と僕の二人三脚である程度やってきたようなブランドですが、酒造りは、杜氏＋αで蔵人たちがどれくらい頑張ってくれるか、というところが非常に大切な要素になります。だからこそ、共通認識、モチベーションが大事なんです。

会社の次の展開は？

「紀土」のあと、「平和クラフト」というクラフトビールを5年前に立ち上げています。次の展開としては、東京駅から徒歩10分くらいの日本橋兜町に、どぶろくの醸造所と呑める場所を作ろうと進めています。来年5月にオープンの予定です。これから日本酒を呑んでいただく方の入口となる、カジュアルでおもしろいツールになるのではないかなと思っています。

現在、当社の商品を世界30か国に輸出しています。コロナ前は年間12回以上海外へ出張するようにしていました。そうすることで、取引先を増やすことができたのですが、コロナにより業界全体が厳しい中、海外輸出が伸びたため、当社は売り上げを維持することができました。コロナが終息すれば、また海外輸出に積極的に取り組みたいと思います。

現役の学生に伝えたいことは？

京大の経済学部のビジネスの大学院に、経営技術を学ぶため2017年から通いました。いい勉強になりましたし、経営にも活かせることも多かったです。社会人になってからあらためて行ってみると、勉強ってほんとにおもしろいと思いました。学ぶっていうこと自体は実は結構おもしろいことで好奇心を満たすということは楽しい。そのベースが智辯にいたときに生まれていたと思います。そういう好奇心を大切にするということがすごく大事で、受験勉強が終わってからその学ぶっていうことを見つめなおしてほしい。

あとは、チャレンジをしていく必要性があると思います。卒業するとチャレンジの幅が広がります。在学中からチャレンジ精神を育んでおいたらいいのかなと感じています。僕の学生時代は、いい大学に行って、いい会社に入って、といった昭和的な生き方が成り立つ時代だったと思います。でも、今、人生の選択肢ってすごく広がっていて、生き方の価値観はかつてのようではなくなってきています。何がしあわせで何がしあわせではないのか、決めるのは自分自身です。結局トライアンドエラーをたくさんしていくことで、自分はどういう生き方が向いているのかを探していけると思います。若いうちからチャレンジ精神、トライアンドエラーを繰り返していくことで一人一人の生き方とか、何がしあわせなのかを探していってほしいな、と思っています。

昭和三年創業
平和酒造株式会社
和歌山県海南市溝ノ口１１９番地 TEL 073-487-0189 FAX 073-487-4641

※全国1200社ある酒蔵のうち唯一大卒新卒だけを採用
※女性が社員の半分を占めており、和歌山県がすすめる「わかやま結婚・子育て応援企業同盟」にも参加

2004年から専務取締役
2019年から代表取締役社長
ご家族は高校の同級生の奥さまと三人の娘
長女は智辯学園和歌山中学校に通い、
ご本人は育友会の役員も務める。
ものづくりの理想郷（㈱dZERO 2014年）
ﾒｲﾄﾞｲﾝｼﾞｬﾊﾟﾝをぼくらが世界へ（㈱dZERO 2015年）
「個」が立つ組織（日経BPﾏｰｹﾃｨﾝｸﾞ 2019年）
の三冊の著書がある。